

會



報

1950年11月

152

日本山岳會

アンナ・ブルナの
初登頂を聞いて

堀田 彌一

ネパール・ヒマラヤのアンナ・ブルナの初登頂について、九月十日の毎日新聞に、フィガロ紙より轉載されたイシャック氏の手記がのつてゐた。この記事を読んで八千米を超えた山がどんな具合に初めて登頂されたか、その概略を知ることが出来て深い感銘を受けた。詳しい報告と十分な研究がなく、この登攀に關し述べる事は勿論、又アンナ・ブルナについてもフランス隊についても、何等の知識を持ち合せてゐなかつた自分がこれを探り上げた事はもとより適當ではない。それにも拘らず筆を執つたのは、この遠征隊の成果が眞に素晴らしいものであり、推理と暗示に満ちてゐるからである。

一九三六年に登頂されたナンダ・デヴィが世界最高の登頂峰であつたが、それから十五年目の今年フランス隊によつてその記録が更新された。しかも世界の懸案であつた八千米級である。記事に依れば第五キャンプを最終として登頂した事、ベースキャンプから僅かに十九日目で登頂に成功した事、最後にベースキャンプを撤収する迄の全登攀行程が一月にも満たない事、一名の犠牲者も出していない事がわかつた。これらが凡ゆる點で恵れたとしても猶まさに驚異的である。この驚異的な結果がそのまゝ登攀隊の最も興味ある特徴として見る事が出来る。即ち短時間、少數キャンプ、少數パーティーと、初めて八千米級に成功した事との因果關係については多分に推理を働かす事が出来るからである。初期のヒマラヤ登山者は岩や氷雪の技術には勿論優れてゐなかつた譯ではないが、未だ探検時代の餘蘊もあつて高さより寧ろ掘りのある足跡を残してゐる。従つて非常に伸びのある行動にも拘らず、氷雪上の露營を重ねる事が少なかつた。多くの場合少人数の單獨パーティーであつて、雪線以上のキャンプに永くねばるやうな事も少なかつた。それがエグゼレストの登山が始まつてから大規模で組織的に企てられるやうになつた。そしてこの登山形態こそエグゼレストを始め、八千米級の最善の方法であるとしてゐたやうである。事實エグゼレストの登攀は回を重ねるに随つて大掛りなものとなり技術的に非常に進んだものとなつた。

一九三六年に至つて第五回エグゼレストが意外にも不調であつた直後に行はれたナンダ・デヴィが呆氣ない程簡単に成功した。勿論兩者をそのまゝ比較する事は出来ない。問題が違ふ程差異があるからである。然し乍らナンダ・デヴィの登頂以來、ヒマラヤ登山の一つの新しい傾向が生じて來た事は見逃し得ない事實である。即ち比較の少人数のパーティーで敏速な行動をする事に依つて大組織から來る缺陷を除かうとした事である。ナンダ・デヴィの成功者の一人であるティルマン氏は、その主張者であり、自らも一九三八年のエグゼレストで實行に移した。結果は完全な成功には至つてゐないが多くの暗示と指針を與えるものである。

今回のフランス隊は比較的少人数で非常に敏速な行動をとり、八千米級のアンナ・ブルナに登頂した。この事は一九三六年にナンダ・デヴィで試みられたと同じやうに方で成功したものと云つて差支へない。従てティルマン氏の主張は一層重要視されるべきものであると思ふ。果してこの方法により最後にエグゼレスト登頂迄もつて行けるかどうか非常に問題だが、兎に角八千米級は陥落した。これを實證したフランス隊のエルゾーグ氏は最高の敬意を拂はねばならぬ。

ヒマラヤに於て登山方法がこのやうに必然的に變化して來た最大の理由は、登山期間と天候にあると思ふ。モンスーンと言ふ不可抗的のものがある以上は、組織の擴大による登山方法に限度がある。ヒマラヤ登山がモンスーンに對抗し越年的の大規模なものに迄發展する事が可能であるかどうか自分には分らないが、モンスーンの前か後かの何れかを選ばねばならない。現在迄の大登山はモンスーン前を登山季節として選んでゐるものが多い。長い山麓の行進の爲めに雪解けを待ち、モンスーンの始まる六月初迄の間はヒマラヤの大ものにとつては時期が短過ぎる。

こゝに八千米級の山が、ベースキャンプより二十日以内で登頂し得た事は、今後のヒマラヤに對し動かす事の出来ない指針を與えたものであると言つては過言であらうか。高さに對して次第にシャープな登攀方法が採用されねばならない時代に於て、今回のエルゾーグ氏等の行動は全く見事なものである。と言つてもヒマラヤに對してはグレンデの域にも達しない我國内での登山に、そのまゝ適用しようとする事は絶対に避けたい。このやうに高さに對し、非常に伸びのあるシャープな登攀を続けるには、何んな準備を必要としたか、又何んな訓練をして來たか、最も知りたい點である。恐らく輕くて優秀なものであつたに違ひない。食糧も亦餘程研究されてゐた事と思ふ。高さによつて食糧は非常に複雑且つ微妙な影響があるからである。

訓練方法についても十分考へて見る必要がある。初心者訓練ならはゞいざ知らず、八千米級に通用する天才の登山者の出現を急するならば、程度の低い型や法式に當て嵌め過ぎてはいけなないのであるからうか。のびのびとした豊かな山行をした事のある登山者が、實際にヒマラヤに於ける或る高度にぶつかつて經驗した事實の上に立つて、その獨創性と自身に對する嚴格な馴れとによつて養はれる技術こそ訓練の中に採り入れるべきである。

勿論八千米級の登攀者だけでヒマラヤ遠征は成り立つものでない事は、こゝに更めて述べないまでもない事だが、天才の登山者の出現なくして更に八千米級の更新は恐らく不可能のやうに思ふ。

ともあれ今回の成功は我國の登山界に對しても勇氣と希望を与へるものであり羨しい限りである。



(佐藤久一創作)

大島亮吉君の事 (2)

成瀬 岩 雄

尙もう一つ近頃頻りと彼を思ひ出させてゐないのは、彼が死ぬ迄待ち侘びてゐた一冊の本が最近になつて發見せられたからであるそれはクリスチャン・アルマーの「フューラー・ブーフ」の寫しなのである。彼が自分に教えた「ギルド・トップ」の立派な本だ。生前彼とチャールス・エドワード・マッシュユースの「アナリス・オブ・モンブラン」を英國から取寄せた時、同書の巻末にアルマーの「フューラー・ブーフ」の寫しが一八九八年に、二百冊、限定版で出版されてゐるのを發見し、早速英國に注文した見ただけでさすがは限定版の偉力と云ふか遂に之だけは姿を表はさなかつた。親父が山が好きでも息子の時代になつて山なんて嫌ひな奴がゐる本なんか賣飛ばす奴がよくある手が、一八九八年の頃だと相當な大物もあるから二百冊と限られた奴の古本の中には、一度相當な奴の手に渡つたものもあるに違ひないから案外大物の所蔵サイン入りのものでも来るかも知れないぞなんて、勝手に

な想像と希望を持つて待たれたけれど遂に之だけは姿を表はさなかつた。最近さる藏書家の手から、日本山岳會に入つたのだが彼には是非見せ度かつたものなのである。何しろ黄金時代の英國山岳會の重鎮、それこそ「先蹤者」に載つてゐる御歴々の筆跡、文面の走り書きが見られるのだから、當時「先蹤者」の執筆に専心してゐた彼に取つては誠に好個の材料となつたのであらうし、之があれ「先蹤者」も尙面白いものになつてゐたに違ひないと思ふと誠に残念な事である。

最近又「先蹤者」を讀み直して見て何んだか彼が「ゲオルグ・ウインクラ」に似てゐる様な氣がつた数多い手紙を見ても、如何にもウインクラの影響を受けてゐると思はれる或時代があつた様に思はれてならないのである。彼が軍隊生活を終る最後の頃はよく軍服で自分の家によつて来て、歸營時間を氣にしながら夜遅く迄山の話に耽り、遂に駄馬で麻布三聯隊に歸つて行く事も再三では無かつた。軍隊生活も終りに近くなつた頃貰つた葉書

「三月の終りから守門、淺草と越後の山を歩きます。四月か五月にはカタ雪を踏んで北海道の知床半島に行き度いと思ひます。全然未知の山ですが小生に取つては誠に興味の深い處です。熊のウジャ

ウジャゐる處、全然地圖の無い處この知床は小生にとつては年來の宿望であつたのです。軍隊を出たら又ユツクリ會ひませう」を思ひ出してウインクラが一八九八年、ミュンヘンよりウィーンの親友ランメルに宛てたと云ふ手紙（「先蹤者」五一五頁参照）親愛なるヘル・ドクトル！

此の登山季節に小生は一友人と共に瑞西の旅行を計畫致しました。けれど其れは願ひ致しました小生の休暇は早くとも八月十日か十五日以後でなければ始まりません（試験が其んなに長く續くのです）。其の時はもう好い登山の季節は終つて居ます。小生は、其んなに遅れて瑞西に行つても、尙其の勞に償ひするや何うかと云ふ事を同地の山の事情に詳しく貴兄にお尋ね致します。貴兄こそ其の時分に於ける其地の状態をよく御存じでせうから、何うか何時頃まで高山地の旅行が出来るか、其の最極限の期間を御教示下さいませんか。小生の二ヶ月半の休暇の一部分は既に晩秋に掛つて居るので悲觀して居ます。前以て貴兄が御通知を感謝しつゝ。

一八九八年七月二日

ミューンヘンにての中に含まれる熱情に何か相通するものがある様な氣がしてならないのである。軍隊生活前後彼から貰つた手紙は、皆何處かこのウインクラを髣髴たらしめる所があつた様な氣がしてならないのである。

それは未だ谷川岳が今日の様に人口に膾炙してゐない時であつた

が、二人で上州の武尊山に晩秋の或日登つた時の事だ。その晩は武尊山の頂上の古守堂で寝て、素晴らしい夕の景色と朝の景觀を味はつた時の事であつた。西の方に朝日に輝く相當大きな岩壁に、初雪の白いジョイントの入つた山を見つけたのだ。大體見當はついてゐたものゝ直ぐ二十萬の地圖を出して見たら谷川岳だと云ふ事が判り、是非試みねばならぬと云ふ事になつたのだ。そして翌年の三月と五月に確か大賀君と行つたのが最初だと思ふけど、その時寄越した葉書

「谷川は直立八百米の岩壁もあつて物凄く、應高以上かも知れません。あまり長く上を見上げてゐると首が痛くなつて來たので、しまひには寝て見ました。併し面白そうな處。未だ二、三回は行つて見る價值あり」と。

ウインクラがカイザーゲベルの岩峰を岩から岩へ新登路を求めて獨り彼が「日記」にその思出を記して行つた様に、彼に取つて當時の谷川岳は楽しいものであつた様だ。

五月末に一緒に秩父を歩いた時の事、ミヅカキ山の麓、松平牧場の一夜も樂しい雨に閉ぢ込められたが、夕刻になつてすつかり晴れ上つたので、新緑の牧場を歩き廻つた。折しも夕焼に輝く尖塔のミヅカキ山を見上げた時は思はず「ドロミーテン」と叫びながら二人共この「ドロミーテン」に吸付けられる様に緩い坂路を駈上つてゐた。何處からともなく炭

焼の煙が靜かに流れて來て、郭公が頻りと啼き出す。平和な夕の景色に暫らく二人は傍の草原に寝轉んで「ドロミーテン」を默つて眺めてゐた。眞紅なその尖塔は恰も明日の快晴を約するが如く靜かに暮れて行く。その夜はゲオルグ・ウインクラの話を聞かせて貰つた。

晩年彼はよく云つてゐた。日本の山なら冬山は別として夏山なら獨りで歩くに限ると。獨りで氣儘に、時間に制限を受けずに地圖を相手に歩くに限ると。獨りで歩くに反つて、人を頼りにしないから持物も慎重に考へるし、無理な歩き方もしないから、危い事もないし、そして御泊りは頂上で寝るに限ると。朝と晩の美しさは頂上でなけりや味は無い景觀だ、よく云つてゐた。其時は彼ももう既に放浪性の快味を充分味はつてゐる時で、彼は決して宿屋には泊らなかつた。自分も一緒に歩いてゐて、ついで宿屋に泊つたのは、冬五色温泉に一回泊つただけだ。もつとも斯んな慣れない豪遊をした罪かその翌日には一行八人東大嶽の頂上で思はぬ夜明しをして雪穴の中に一晩寝た事もあつた。遭難と云つては大袈裟だけれど、當夜の彼のリーダー振りの鮮かさは「登高行」第七號にも載つてゐる。それは時恰も彼がフィンチのテーデリーの遭難記を讀んだ直後でもあつた。彼は小舎か戸外にゴロ寝の一天張りであつた。勿論お互ひ義中豊かで無かつたせいもあるけど彼としては勿論體裁等毛頭考へてゐなかつたし、之で充分エソジヨ

イしてゐたのだ。レスリー・ステイブンの「モンブラン山頂の日没」とかエリス・カールの「ソー・デイス・オンザ・アイス・スロープ」等よく話をして呉れた。彼としては之等の著書の片鱗を味はつた積りであつたのだらう。彼の山の味はひ方を見ると、或時は谷川の岩壁に、又氷雪の穂高に、又或時は高原に、北海道の澤歩きに、又或時は峠から峠へと楽しんでゐた。即ち或時はマンメリー、ウインクラを偲び、或時はエミール・ジャヴェルを、クリリッジを、又フレッシフィールドを偲んでゐたのだ。近頃自分は彼の登山歴と「先蹤者」の目次の順序を見比べては獨り彼を偲んでゐるのである。

そして彼が筆にしたものは單な

「山」という雑誌の五月號に、私は登山家という肩書き付きで名前が出された。この時、生れて始めて、登山家と云われたわけなのだが、なんとなく胸にしまつた大切なものを、奪い取られた感じがして、悲しかった。會員の中には、登山家と云われ、且つ書かれる人も少くないのだがよくもあゝ平氣でいられるものと、私は不思議でならない。こう云うと、私一人、神經質で、

氣が弱いように見えるのだから、なおさら、不思議な出来事である。

「登山家」追放

落語家とか評論家。建築家とか聲樂家とかこの家を最後につけた味方は澤山ある。この家という字が、どう云う意味をもつたものか、私は學問的には何も知らない。私は私なりにこゝろ解釋している。家というのは、一家をなしているという事で、大體それを一つの職として、生計の道をたてていることではないかと。ノド自慢でいくつ鐘が鳴つても聲樂家とは云わぬようである。ス

る紀行的なものばかりでなく、アルプスの初期の登山者のその如く地形學的の事、雪崩等に關する科學的事、又方言に關する事、總て山に關する事は彼の筆の對象であつた。ウォーター・ラーデンと云ふ人の「リコレクシヨン・オブ・アン・オールド・マウンテン・ヤー」と云ふ本は仲々いゝ寫眞が澤山載つてゐる本であつたが、この巻末に「ハウス・インスクリプション」の事が書いてあつたが、スキスの山村の古い家の外壁等に聖書の文句等が澤山刻み込まれた家がある事を記されてゐるのだが之等も彼は興味を持つてゐて何れは之について何か書くかと云つてゐたのだが、そして松方氏にもこの事はよく聞いて見るのだと云つてゐた。秩父の山村と一緒に歩いてゐる時に、あの邊りから上州

に掛けて澤山見られる屋根に石の置いてある村の家々の遠景を眺めながら、彼はこのラーデンの一部を自分に語つた事を思ひ出す。そして三川峠を上州側へ越した所の小さな村で、多分校倉式と云ふのだと思ふけど、如何にも寫眞で見るとスキスの百姓家に似た一軒の家を見つけた時は、暫らく立止まつて眺めてゐた。その家はその近邊で唯一軒しか無かつた。

實際彼の「峠あるき」や「荒船と神津牧場」等は文學的の見地から云つても誠に立派なものであるし「峠あるき」等は漱石の「草枕」にも峠の描寫があるけど、その内容の豊かさから云つても彼のものも亦勝るとも劣ら無いものだと思ふ。それは彼と夏も終りに近い九月の初旬だつたと思ふけれど、仙ノ

ボーツに關係しては、拳闘家という言葉があるがアマチュアのボクサーに對しては云わぬやうだ。日本山岳會は、始めからアマチュアスポーツ團體として發足した會ではなかつた。戦後體協を組織する一員となつたからには、アマチュアスポーツをどこまでも、守らなければならぬ。

その昔、山を征服するという言葉は、どうも氣になつたと云つた登山家諸氏であつた。スポーツマンには珍らしい細かい心ずかいだつた。

こゝろに、一方では細かい點に、大眞面目であつて、片一方に大開抜けをしているところ、日本山岳會の貴族的な良きなものであるけれども、私個人はアマチュアスポーツマンを自認し、その誇りをもつてゐる身だから、いくら登山家と味んでも、決して返事をしないことにしている。

(關根吉郎)

倉を上州側から登らうと云ふ事で二人で出掛けた事があつた。この旅は雨にばかり祟られて例の通り河原にゴロ寝の我々は、唯濡れ鼠みたいになつて、鳥渡した暗間を利用してはあの邊の澤を數ヶ所歩いただけで、たゞく仙ノ倉へも登らずに歸つてしまつた。併し一晩中、歌つたり、語つたりして夜を明かしたのも樂しいものであつた。恰度其の日、タル澤を登り掛けてゐた時に、村人風の者が一人孤包みの様なものを背負つて、ブラブラやつて来るのに出會つたのである。どう見ても登山者には見えない其の姿や様子から、鑛山師か何かかと思つてゐたが、よく聞いて見ればそれは下の村で子供が熱病にやられてゐるので態々殘雪を取りに來たのだと云ふのである。

之こそ彼が「峠あるき」に書いた「十文字峠」では無いか。併し今日自分は此處で、この「十文字峠」の内容については、クドクドと書き寫す勇氣は無い。あの時の自分の嬉しさと云ふのか、つまり氣分を壊し度く無いのである。それは餘りに自己陶醉かも知れないけど、寧ろ心ある讀者には、今一度彼の「十文字峠」を續いて載さ度いのである。彼も亦心中秘かに思ひ起した事であらう。自分としては此の旅は例へ山頂には達せずとも、もう之だけで充分樂しかつた旅であつた。その夜、河原で岩蔭に雨に濡れながら、彼と語り合つてゐる時、「峠」なんて日本語の儘にして置くのは惜しいから英譯でもして發表したいと思ふと勧めたら、彼は即座に「英國ぢやあゝいふものは向かないよ」と答えてゐた。併し今でも自分は惜しい事だと思つてゐる。と云ふのは其後、レスリー・ステイブンが一八七三年にモンブラン山群中のコル・デ・デロンデルを越えた時の事を讀んだ事があるのだけど、それはステイブンが當時未踏のこの峠を越え様とした時、何んだか譯の判ら無いものが氷河の上に、奇妙にも左右相對して圓陣を作つてゐるのを見たこと云ふのである。何か二十個ばかりの黒い點のやうなものが身動きもしないでデットしてゐるので、近寄つて見ると、思はず哀憐の情を禁じ得なかつたと同時に斯の高い所の嵐の恐ろしさをもまさまざと見せつけられたと云ふのである。この二十個の物體と云ふのは、燕の死體であつたと云ふのである。燕の一隊がそんなに急に打ちのめされた事がどうして起つたかを考え直して見た。彼等のあの強力な翼で、もう僅かの十分間も飛べば、シャモニーの森か、南の暖かいイタリアへ飛べたであらうに、一瞬、物凄く突風にたゝきつけられて死んだのか。一塊りになつて死んでゐる其姿はこの荒涼たる雪野原には誠に悲壯なものであつた。早速この峠の名を「コル・デ・デロンデル」(イロンドンとはフランス語で燕の事)と呼ぶ事にしたと云ふのである。「左右相對して圓陣」とは、鳥が一隊となつて、空飛ぶあの編隊では無いのか。その編隊の儘の形で雪面に死んでゐたと云ふのであらう。之を讀んだ時直ぐ自分は、如何にも彼の「峠」を思ひ起さす様なテーマでは無いかと思つたのである。

そして彼が曾て高らかに笑ひ乍ら「英國ぢやあんなものは向かないよ」と云つたのも、あなたが、否定す可きものでも無いぢや無いかと残念に思つてゐるのである。

「荒船と神津牧場附近」等は正にエミール・ジャヴルの生寫しみたいだとは思つてゐるのである。それは彼が事實ジャヴルに心酔してゐた頃でもあつたらうが、事實その中に書いてある様に「牧夫小屋の窓枠がたゞ」と西風に打ち鳴るやうな日に太い松薪のちらちら燃える暖爐の前で、靜かに本氣になつてあのジャヴル遺著の幾頁を、ほんとに自分のために讀み耽つた」とある通り、少々云ひ過ぎかも知れないけど、自分は、この「荒船と神津牧場附近」の中に出て来る日本語の地名と固有名詞を全部、ジャヴルが愛したと云ふル・サレエダの山谷の邊の地名と固有名詞に書き換へて、エミール・ジャヴル著として、恐らく讀者はジャヴルの書いたものだと思ひけるのでは無いか知らと思つてゐる。其程この「荒船と神津牧場附近」はエミール・ジャヴルの生寫しみたいな綺麗な描寫だと自分は獨りで決めてゐるのである。又實際下手な翻譯を讀むよりは却つて斯んな勝手な想像を入れて「荒船と神津牧場附近」でも讀んだ方が餘程いいと思つてゐる。

もう一つ彼の書いたものゝ中で今でも自分は好きで忘れられないものは「登高行」第四號に發表した「山上所感」である。この中で彼も云つてゐる様に山に登らない山岳鑑賞家のラスキンやバイロンの

事をレスリー・ステイブソンが極めて價値少なき不眞實なものと見做してゐる點を強調して「私は想ふ。しかし現に山に登る身のものにとりての山を眺むる心は、たゞそれを自らに知られざるもの、或はまた自らの達し得ざるものとしてあることができるのではなく、全く知悉と了解とを基礎とした極めて理智的現實的な實質を備へた願望を伴ふものである」と云つてゐるが、彼こそは正にラスキンの文才とステイブソンの登高熱を持つた立派な登山家であつたと言つても過言では無いと思ふ。

彼が書いたエミール・ジャヴルのもの等を讀んでみると、彼が何んだかパイプでもくはえてゐる瀟灑たる文學青年みたいに一應想像するかも知れない。事實自分も彼を知る以前は、まあそれに近い想像を持つてゐたのだが、後日親しく接する様になつて見ると、凡そ反對の人物で、夏の午後等彼の家を訪ねると、二階で揮一つになつて一生懸命に「先蹤者」の原稿にペン走らせてゐるのである。凡そ瀟灑たる青年に縁の遠い姿であつた。晩年彼の翻譯も漸く油が乗つて来て、イタリア語の勉強も始めてゐた。勿論目的は他でもない、山の本を讀む爲にである。彼がもつと續けてゐたらゴドレーイやアブルッチー等のあの綺麗な文獻を堪能する迄に我々に傳へてくれたに違ひないと思ふと誠に残念である。

最後に、惜しく感ぜられる事は彼がもつと生きてゐて、日本山岳會の大先輩、木暮さんや小島さんに接する機会があつたら彼自身は

勿論、日本の登山界のためにも何物かあつただろうと思ふ。勿論既に彼の當時發表した著作だけで、日本の登山界への影響も大きなものがあつた事は疑ふ事の出来ぬ事實ではあるが。

當時漸く沈滞し掛つてゐたかの様に思れる日本山岳界に對しては彼は當時としては日本に於けるパイオニアワークと云つても差し支無い積雪期の登山や岩登りに彼が相當のレコードを造り上げた、一種の若者のブラウドもあつたかも知れないけど、一面、日本山岳會の長老、木暮さんや小島さんに對する尊敬は決して忘れてはゐなかつたのである。その證據には彼自身「登山思想の推移」は田部重治氏の慶應山岳部に於ける講演「山は余を如何に影響しつゝあるか」の影響が多いと判然云つてゐるし、又晩年には「山岳」に寄稿も一部筆を起してゐたのであるし、彼自身事務の休日には一日曜日必ず當時の日本山岳會の常例會場であつた清水谷皆香園の小集會に出掛けては文字通りの末席を汚してゐた。しかも我々は會員では無かつたのだから、むしろ遠慮勝ちに廊下の隅つこに座つてゐた事もあつた。そして上席に列する木暮さんや高野さん、武田さん高頭さんを見ては彼は「武田さんつてマンメリーに似てゐるよ」なんて自分に教えた事もあつた。彼がもつと生きてゐたら木暮さんや、小島さんと親しく膝を交える機会も必ずあつたらう。それは彼の爲にも亦木暮さんや小島さんの爲にも面白かつたのでは無からうか。それ

れは小島さんの遺者を見ても判る通り、彼の書いたものは小島さんも興味を持つて居られた事は隨所に表はれてゐるのだから。

大島亮吉君は慶應山岳部の先輩として唯其の儘になつてしまふのは餘りにも惜しい様な氣がするのだから、勿論慶應山岳部そのものが既に高い水準にある事は事實が證明してゐるが、此處に筆を取つた次第である。斯く立派な登山家が日本の登山史上の一頁を飾つてゐる事を是非知つて貰ひ度いと思ふのである。其の幅の廣い文才と旺盛なりし登高熱は後世の登山家の範として恥かしからぬものである。其れは例へば英國に於ては山に登る者でウインパーを知らぬ者が無い様に、日本に於ても大島亮吉君の著書位は登山家である以上是非一讀すべきだと思ふ。登山家と云ふ以上は唯山を數多く登るだけでなく、山の本を讀む位の餘裕は持つて然る可きでは無いか。

★ヒマラヤン・ニュース★

佛蘭西隊のアンナブルナ初登頂については前號に報じたが今シズンは諸隊がテイリチ・ミール（七七〇〇米）に、英國瑞西の合隊がアビ・ガミン（七三三六米）の初登頂に成功した。

飯原健三氏が寄せた一文は次の通りである。
今夏は歐洲からヒマラヤ遠征隊が送られて次ぎつぎと登頂に成功して戦後初の凱歌を挙げ、ヒマラヤ登山史上を飾りました。
昨年来傳へられてました諸威の

ヒマラヤ遠征隊も同國山岳會、地學協會共同で多年宿望のテリツヒ・ミール（七八〇〇米）の登頂に七月二十一日成功したと申します。其メンバーは次の通りです。

隊長 アルネ・ネス教授 三十七歳、隊員 ハンス・レーウゲ（法律學者）四十二歳、ローレンセン博士 四十二歳、バー・クペルンベルグ 三十二歳、ヘンリー・ペルグ 二十七歳、キャプテン・ストレーサー（英人）二十四歳、パーペンデルボー（植物擔當）二十一歳、フイン・ヨルスタット（地質擔當）二十九歳、外に寫眞班二名合計十名、キャプテン・ストレーサー氏は輸送隊長として參加した。一行は五月二十六日オスロを飛行機で出發印度に向つた。そして諸準備を整へてから奥地へ進んだ登頂したのは隊長ネスとクペルンベルグ、ペルグ、ストレーサーからなるアタック班であつた。テリツヒ・ミールの初登攀に成功した一行は再び飛行機にて八月十六日オスロに無事歸着した。經費約一十萬圓と稱されてますが、物資の寄贈其他計上出来ない援助が相當にあつた様です。本遠征の報告書は十二月末出版の豫定で目下編輯委員が指名され執筆中です。以上が栗飯原氏の寄稿で、山名の讀み方、高度等は從來のものとして若干異つてゐるが一應そのまゝにしておく。
アビ・ガミン 一名イビ・ガミンと呼ばれカミメットの近くに位置し東峰（七三三六米）西峰（七三七六米）の二つがある。今回登頂されたのはその孰れであるか、またその月日も不明である。（九月十七日毎日新聞による）。

第五回國體登山に際して

松方三郎

最初の國民體育大會が關西で開かれたのは終戦の翌年のことだった。今から考えて見ると、その頃の日本はまだ戦後の精神的虚脱状態の中で右往左往していたようなものだ。物質的缺乏や交通の不便など、あらゆる點で困難な問題が山の如く横わつていた。そうした事情の中で國民體育大會のよな企てをすることは、もちろん、いろいろと議論もあつた。しかしわれわれからいへば、一般の事情がそうしたものであつたからこそ、その中で無理をしながら國民體育大會のような國民的行事を強行する意味も、一層強いのだと考へたのだ。

國民體育大會はその後、金澤、福岡、東京の各地を中心として行われ、今回はこれが待望の中京の地に催されるのである。過去四回の大會がそれぞれの段階において大きな役割を果し、成功をおさめたことは議論の餘地がないと思うが、登山部門としても、今回は一つの新しい構想の下にこれまで試みたことのない行事を行つて見たと考へてゐる。

具體的にいへば、今回の行事は最初から新制高校の學生層に重點をおいてすべの計畫をたてゝゐるのである。終戦直後の何年かは残つたものを絶やすことなく大切につ守つて行くことが第一の問題であつた。今日の問題は遠く將來を展望して、十年二十年後の日本の

登山界を背負つて立つ本格的な山岳人を育て、行くことにある。若い世代を中心にして今年の大會の計畫を建てた根本はそこにあるのである。

本格的な山岳人というものは簡単に生れて来るものではない。長い間の厳格な訓練、廣い教養、社會人としての規律ある生活態度、そうしたものがそつて行つてはじめて出来るのである。われわれが若い人々に特別の期待をかけてゐるのは、これがあるがためである。

鈴鹿の山々が日本の山の中で如何なる地位を占めてゐるかは、説明を必要としないだろう。これが日本で一番高い山でもないけれど、難しい山でもないことはいふまでもない。しかし、鈴鹿の山でどんな山登りをやるかというところは、より高い山々でどんな山登りが出来るかということと直接に結びつてゐる。その意味で眞の登山家は、山の高さや難しさよりも、如何に登るかに一層の關心を持つのである。われわれとしてはこの點が、大會に参加される諸君の一人一人によく諒解されることを切に希望する。

今回の大會が成功するか否かは又大會に参加する諸君が、この大會を楽しみ、そこから何物かを得て歸るか否かは、一に全くこの點にかゝつてゐるのである。

【附記】國民體育大會登山部門の

行事については、その沿革と主旨とが既に會報一四七號に明らかにされてゐるのだが、今年の國體登山は、開催地を鈴鹿山脈に決定したため、昨年のやうな高峻山岳を舞臺とする會の實踐的啓蒙指導面の中心行事として採り上げることが始めから不可能であり、方面をかえて新制高校山岳部員を対象とする基礎的な登山を中心とする計畫が立案實施されることになった。今年の國體登山に對する會の考え方は、その計畫實施要項の冒頭に掲げられた松方現理事長の右の一文に十分表現されてゐるので、茲に再録した次第である。

(編者)

越後駒ヶ岳に山小屋新設

名稱 駒の小屋
位置 明神根と郡界根との交又点(参照図 八海山)
収容人員 定員二十五名
設備 ストープ、鍋、燃料、其他水の便あり

宿泊料 維持費として金三十圓
連絡先 新潟縣北魚沼郡小出町小出山の會 伊倉剛三
駒ヶ岳登山は一昨年開鑿した鐵道と今年開いた道行沢から小倉山を経て山頂に至る道がある。尙冬期(十一月—四月末)は戸締りをするから予め申込みのこと。

横尾山莊の越冬營業

會員山田利一氏經營の横尾山莊は今冬を通じて越冬經營することになった。小屋番は沢浦晴見(五八才)。宿泊料は素泊一八〇圓、汁付二〇〇圓の定めてゐるが、その他種々相談に応じてくれるから會員各位の御利用を奨める(小里頼忠)



高田富士(第二回)

關根吉郎

井野邊茂雄博士の「富士の信仰」には高田富士のことも、藤四郎の事蹟も、いろいろと記されてゐる。その中に、先に觸れてゐた「百家奇行傳」に藤四郎が出てゐるのを知つた。この本は天保二年(一八三五)に八島五岳の編集したものであるから、藤四郎が逝つた天明二年(一七八二)からは五十三年目に當る。表題をみればわかる通り、奇行の人間の列傳であるから二行者藤四郎も、一方では一宗教の開祖者として崇められてゐるに拘らず、片方では没後五十年にして、一人の奇人と目する風潮もあつたことが知られる。井野邊博士の著書に精しいから、此處には繰返さないが、藤四郎こそは富士行者の祖身縁の弟子であり、第一の後繼者であつた。その上、文化、文政にかけては、江戸富士の信仰もその頂點にあつたらしく江戸の街中に築かれた富士も、その頃が一番多いのである。藤四郎のどの様な行ひが、それでは奇行と見られるのであらうか。

に當つて、少々長い全文を次に記してみる。

「駒込高田の町に藤四郎と云し者ありて殊に富士を信心し七十五度登山したりとぞまた青山若松町といへる處に伊勢屋彌市と云ひし者はまた富士信仰にて寶曆より寛政の始めまで八十三度登山したりと富士の麓下淺間の杜に彌市が建立の鐵佛あり文化のはじめ九十三にて終る四谷の龍昇寺といへるに葬す高田の藤四郎は彌市に増りて躬の行ひも人とは大いに異なりしとぞ或人いかなれば斯富士山にのみ數度のぼり給ふぞと問ひければ藤四郎答へて曰く世人佛法を信じて極樂に往かん事を願ふ者多し然ども誰か一人極樂へゆきて見て來る者なし死ての後の事何ぞたのみならんや富士は三國にてたゞ一固の山にして登れば最天にちかく是則天上に生を得たる心地するなりまた富士の八がふ目にあつて夜月の來迎を拝するときは月中に三尊の如來現はれ給ひ五色の雲たなびき其の尊き事譬へんにも外にあらず寔に極樂といふは爰より外にはあらじと思ひ侍ふ釋尊の説き給ひし極樂は十萬億土の末にありて凡人の行きて拝むこと能はず我々が信ずる富士山上の極樂は一年に一度づつ拝まるを以て只管富士へ參登つたまつりぬ但躬のおこなひあしき惡人の登山するときは忽ち山あれ震動して時によりて人を掴もて投げおとし去方の知れざるも亦多し是れ則富士の地獄なりされば地獄も極樂もこの山に有りて外になし是れ皆目

前見る所にして誣べからず此のゆゑに吾門年々登山いたすなりと答けるとぞ」

ひどい假名づかいで大變読み難いが、最後に答へけるとぞとあるやうにこの答へを藤四郎自身が本當にしたものかどうかはわからない。信者の間では、開祖の尊い言葉として語り傳へられて来たものであらう。少くとも眞面目になつて信する一群の信者はゐたであらう。

始めのところには、行ひが他人と大いに異つてゐたことを證明するために彌市といふ人物を引きあひに出してゐるが、その彌市は一生の中、八十三度富士登山をしたことを記してゐる。藤四郎の方は七十五度と回数はいくつか違つてゐる。行ひは彌市にまさつて變つてゐたといふから必ずしも、富士登山の回数が奇人の函數と云ふわけではないにしても、大いに奇人と關係付けられてゐることは間違ひない。次のいかなれば斯く富士山にのみ數度登り給ふぞと問ひければと云ふ一文はこの事實を自から裏書きしてゐることになる。文化が進み、登山が一般化した今日にあつては、一年の中に三度も五度も稔高などへ出掛けたり人少くならは凡て奇人として取扱はれるところであつたかも知れない。それに對する藤四郎の答は、民間信仰宣傳の常道とも云へる、我田引水の強引な説であるが、これらの問題を考へるに當つては、その中心をなすべきところである。

どの様な點が、富士山と宗教とを結び付けてゐるか、どの様な種

類の宗教であるかと云ふ様な點から觀察を進めていき、果して藤四郎は奇人であらうかと云ふ様な點も併せて考へていくことにする。

日本人の間には、昔からシムメトリの美を排する性情が根強く支配してゐた。それにも拘らず富士山だけは、名山富士であり、三國一のお山であつた。また氣高い崇高な日本精神の象徴として、文部省は幼な兒に教へることを怠らなかつた。然し藤四郎の答に依ると、あながち富士山の眺められた美にひかれてゐたわけではなかつた。藤四郎答へて曰くから先をみると、第一に佛教の用語が多いの氣が付くから、佛教的色彩に染められてゐることが理解出来る。極樂、三尊の如來といつた類には皆さうである。富士信仰は現在では神道の一派として許されてゐる様だが、この一文の中には神の觀念は一向に現はれてゐない。強ひて言へば、最後のところの善人には極樂を與へ、惡人には地獄を與へるところを強力に善惡を區別する力の神として考へられたいこともないであらうが、やはり直接に地獄極樂を問題にしてゐるやうである。それから云つて、佛教こそ多くの宗教の中でも來世を説くことが主であるやうに思へるのだが、藤四郎の答は、死しての先のこととは何ぞ頼みならんやと云ふやうに、まつたくの現世主義である。現世主義でも、富貴長命を露骨に希ふ道教の思想も、表面には姿を表してはゐない。垂跡思想の強かつた江戸時代であるから、神の道にも佛教的表現が借用されてゐるのは許すべきものとしても、現

實主義は説明し兼ねる様である。死んでしまつてからでは頼みにならないから、生きてゐる間に極樂を見物しようと思ふのであるが、極樂をみてどうしようと思ふのであらうか。(以下次號)

(附記 本文は會報一三六號の第一回に續くものである)

春季體育週間山岳行事豫定

劍立山スキー登山及び技術講習會

明春四月下旬より五月上旬にかけて春の立山及び銀岳を舞台に登山界の全国的な行事を行うことに話が進んでいる。本会の行事としてウェストン祭及び従来の富士山に於ける講習會以上の成果を挙げることが期待されてゐる。幸い地元富山縣でも縣として御世話下さることになつてゐるので、全国岳人の御参加を希望する。予定コースは次の如くである。

- A班 粟巢野―称名―追分―別山―越中―各ルートより銀岳頂上―雄山―天狗平―粟巢野
 - B班 粟巢野―称名―地獄谷―雄山―別山―大日―天狗平―粟巢野
 - C班 粟巢野―ブナ―天狗―雄山―淨土―追分―粟巢野
- 募集人員 一五〇名
- 尚詳細及び要綱は追つて発表する

本年度の會費未納の方は至急御納め下さい

★年額 三〇〇円
★東京支部員は五〇〇円

持つて輕るく 張つて楽しい 細野のテント

(東京高等學校山岳連盟)御用

東京都千代田區神田須田町2の23

細野博吉商店

電話 (66) 6242

皆様の

寫真仕上工場が 完成しました。

シャツター以後の仕上は御希望の
現像液、印畫紙で

東京都中央區銀座西4の1 電話京橋(56)3073

有限會社 山映商會

刊 堂 溪 茗

昭和廿六年版 山日記 160圓

赤布クロス装
ポケット型

登山のためのスキー術 270圓

林理事の好著

山 岳 第45年 價未定



圖書紹介

ヒマラヤ登高史

藤木九三著 アテネ文庫
七八頁 弘文堂刊

著者は本書の冒頭十二頁に亘つてヒマラヤの概観を述べ、ついでヒマラヤの黎明期から達次筆を進め、今世紀以降はエヴェレスト、カンチ、カラコラム、ガルワル、ナンガ・パルバット等と各章に中心をもたせつゝ史的事實を興味深く敘してゐる。併し、本書がこの文庫の一冊であるといふ性質から一般の讀者のために書かれた點を考慮しても、猶私が開巻前ひそかに期待した所は、このやうな事實の羅列のみではなく、ヒマラヤの登山に對する考へ方が、また登山の技術や方法がどのやうに變化し發展してきたか、高度に對する人間の考へ方がどのやうに進化したか、八千米峰と七千米峰に對する難しさの違ひがどのやうに明らかになつてきたか等といふやうな點であつた。藤木氏のやうに居人の間でも廣く海外の文獻に通曉し、また永く文筆に親しんだ人にしてはじめてこのことが可能であらうと思

はれたからである。一世紀に亘るヒマラヤの登山史を文庫版七八頁に要約することは容易でないとしても、史的事實の敘述のみを主とするなら尙他に人があつたであらう。

細かい點では、ヒンヅクシュ・ヒマラヤと書かれてゐるが、ヒンヅクシュをヒマラヤの中に入れて呼稱するのは適當でない。カシュミール・ヒマラヤもバンジヤブ・ヒマラヤと呼ぶ方が普通である。分類法は從來一般に用ひられてゐるもので不都合ない限り、それを踏襲する方がよろしいと思ふ。とまれ戦前刊行の多くの書物が求めにくい時、万人に入手し易い本書の刊行は居人のみならず一般の人にも過去のヒマラヤの登山の概要を示すに足るものである。(T・M)

會員通信

北海道だより

小樽 坂江 善治

道體育大會の山岳演技といふ催しをJ.A.C北海道支部主催で、小樽近郊の赤岩山といふ三百米餘の海岸からそり立つ岩山でやり小樽山岳會が万般の世話をやいて、九月二十三、四日と結構面白く終了しました。根元から三〇一五〇米位の大小岩峰で、岩登りをやつたり、ガレ登りをしたり、札幌から支部長山崎泰雄先輩も見えて、有意義な集りでした。全道から百餘名参加しました。

八ヶ岳だより

白田 河内 洋佑

夏の失敗にかんがみ、輕裝備で九月二八、九杣添左僕と天狗尾根天狗澤を登つてきました。第一日は海口の牧場から左僕をへて、赤岳石室直下の俣松の中にビヴァーク。夏一日半のところ一日でした。瀧は逆層のすどいのが三つ。二九日は〇下三度。強風について赤岳をこえ、天狗尾根を下りました。大天狗をこえ小天狗直下の天狗澤源流へ入りハンゲした瀧を十五米のアブザイレンド下り、その後は何百米も續くツルツルのガリ一を一气に下り地獄本谷三段の瀧に出ました。ミヤマハンノキの紅葉のアーチのかたに屹立する灰白の小天狗岩塔が印象的でした。

山形支部より

三浦 敏雄

本日東京支部報信濃支部報御恵送に預り有難う御座居ました。當支部發會式の時も坂倉女史より祝辭を頂きましたが筆不精で失禮しました。明年一月の藏王での合同合宿には特に御便宜を計る様致させます。秋の山形は特別によいです。酒と紅葉でお待ちします。

立山だより

東京 城山 正三

立山・劔岳方面は快晴で雄山絶頂の社務所では來籠の名前でとめて貰いました。十七夜の明月下深夜の頂上散歩は殊の外感興深いものがあつた。稜線にまたたく星の数々、月光に青白く光る劔澤

の雪溪、富山平野にきらめく町の灯、頭上足下とびかうコウモリの聲など。翌朝は富士、淺間、日光方面から南北アルプスの全ぼうをほしいままにしました。

八ヶ岳の裾野

諏訪 牛山 大六

會報一五一號いたゞきました。山友達と夏の名残を惜しむため、美濃戸口、柳川川原(七〇〇米)に四日間キャンプしました。阿彌陀や横岳にはちらほら紅葉の氣配がみられミヤマ大文子草などさき蕪る谷間の明けくればした。

鶴岡だより

(一)めつきり秋らしくなつてきました。八久和の寫眞小さいまゝでお送りしましたから御覽下さいこの内から高山深谷に二三枚送つて見ようかと思つています。(石井貞吉)

(二)國體豫選も了り、監督で鈴鹿へゆくことになりました。九月卅日から湯井侯へ入るつもりで今晩(廿九日)役場へ泊つています。國體へ行くメンバーの強化合宿です。その節はルームへお寄りします。(村上勝太郎)

會務報告

アンナブルナの新登頂に成功したフランス山岳會宛に本會は左のやうな祝狀(佛文)を發した。

佛蘭西山岳會々長殿
フランスのヒマラヤ遠征隊が去る六月三日、ヒマラヤや巨峯のひつつアンナ・ブルナの登頂に成功

されたことについて、私は心からの祝意を貴下に申上げたい。八千米を抜く峯頂のひとつが、フランスの登山家によつて初めて征服されたといふ、この成功は、他の國々のアルピニスト達に大きな刺激となるであらう。

貴會の傳統と歴史とが、さらに將來の遠征に花を咲かせることを、私は信ずるものである。一九三六年のナンダ・コート遠征以來、戦争のために吾々は、全く國內に閉じ込められてつた。しかし現在では登山は隆盛となり若い登山者は海外への遠征に望みをもちつてゐるのである。

私は、國際情勢が一日も早く安定して、どこの國のアルピニストでもヒマラヤを訪れるのよろこびをもち得るやうになることを切望してゐる。

遠征隊員の各位に、私の祝辭をお傳へ願ひたい。
一九五〇年九月二十五日
日本山岳會々長 武田 久吉

× ×
年初以來逐次交通の開けつゝある外國山岳會との關係は、アメリカ山岳會、ヒマラヤン・クラブについて最近イタリア山岳會、オーストリア山岳會から書狀が到着、尙オーストリア山岳會報が届いてゐる。

八月 連絡理事會(二、九)月例役員會(廿三)
本年度下半期行事決定、名譽會員招待晚餐會、關西支部關係事項。九月 連絡理事會(六、十三)、

月例役員會(廿七)

主なる事項 第五回國體最終打合
細目決定、技術役員廿名派遣決定
第七回國體山岳地決定、静岡縣と
の共催國體記念富士登山打合、國
體派遣役員六名決定、高山深谷應
募寫眞詮衡委員選任、會費未納會
員に對する方針及納入方督促の
件。

圖書室からの報告

小春日和がつづくやうになると
クラブルームのテラスは山岳放談
には快適な場所を提供してくれる
殖民地の場末みたいな今の東京に
も、こんな気分のないところがあ
るかと思ふほどである。會員がひ
とりでも多くのクラブ・ライプ
ラリーを訪れて、深い関心を寄せ
られることを望んでやまない(F)

寄附者芳名

老千円 福味幸司(京都)

累計二〇、六七〇円

(圖書基金十月十五日残高)

事務所から

★本年度発刊の山日記は既に印刷
も終り近々各位の御手もとにとゞ
けられる運びとなりました。内容
は大体前号と同じですが、細部に
亘つて改訂をほどこしたことは勿
論です。定價も今回はグツと下げ
られる豫定です。

★會報一五〇号に發表した會員名
簿は七月末で切り日迄の予約申込
が一五〇にみたず、このまゝでは
切角の計畫も流産の己むなきに立
至りそうですが、會員各位にとつ
て是非なくてはならぬ名簿のこと
ですから万難を排して発行を計畫
してゐるので、再度申込みを希望
しますから一人でも多く申込まれ
んことを望みます。

★本年度の山岳(四五年)は既に
大体の内容を決定し印刷に回すま
でになつてゐます。併し毎号會報
の紙面をよごしてゐるやうに會費
の納入状況が思はしくないため、
資金の手当で行き難んでゐます。
このためにも會費未納の方は是非
至急御納め下さい。

★前年度及び前々年度の山岳(内
容は既刊の會報御参照のこと)は
予定の部数売り捌いてゐないた
め未だこの會計が赤字となつて
いて會の大きな負擔となつてゐ
ます。未だお求めのない方は是非御
買上げ下さる様願ひ上げます。
★高山深谷の寫眞は十一月末日が
で切ります。多数應募下さい。
★會報も大分昔の姿にかへりまし
た。會員各位の御寄稿を切に期待
します。

昭和廿五年十一月十日

東京都千代田区神田駿河台四ノ六

発行所 社団法人 日本山岳會

編集者 法人 望月達夫

電話(二〇八九番) 日本体育協會

神田(三二四番) 振替口座東京四八二九番

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂溜池五番地

印刷所 株式會社 技報堂

北海道産高級スキー販賣

札幌芳賀製其の他・材質タモ(アツシュ)・アサダ・イタヤ等

冬山用具・スキー用具 一切販賣

優秀スキー靴・御用命賜ります

片桐

東京都文京區湯島天神町三〇十九(湯島天神下電車通り)

電話 下谷(83)5701

(呼出 中村)

